
さくらんぼいず

』 あられ 』

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

さくらんぼいず

【Nコード】

N3316Z

【作者名】

『 あられ 』

【あらすじ】

妄想大爆発ですこんにちは。

主に関係のない導入

「例えばさー」

夕方の街路に、力のこもっていない声が響く。ガードレールを触りながら歩く少年が、隣の友達に話し掛けている。

「お前さー、生まれ変わったら何んなりたい？」

「イケメン」

ぶは、と噴き出す少年。隣の同級生を爛々とした瞳で眺める。

「即答すぎてびびったやんけアホ！ 顔面コンプレックスほんまに半端なさすぎるからなお前！」

笑い騒ぐ少年に、無表情で見返す少年。

「……あ？ この顔のせいで幼稚園児に不審者扱いされた俺の気持ちかわかるんかコラー発殴らせるやアー！！」

吊り上がる肩。少年B突然ヒートアップ。若干涙目なのは気のせいだと信じてあげてほしい。

少年Aは驚愕し、そしてしかしすぐに、爆笑し始めた。ぷ、あはははは！

少年Bはまた無表情になるも、動作の節々に力が入っていて、苛立ちが隠し切れていない。殴ってこいつの顔面陥没させてやりたい、と仕種が物語っている。

そんな彼の心境を知ってか知らずか、少年Aは気を取り直してまた話を切り出す。

「じゃあさじゃあさ」

「……今度はなんや」

Bはうんざりとした表情を浮かべた。それに気付きながらも、Aはそんなことは意にも介さず続ける。しっかりとBを見据えて声を出す。

「もしも魔法が使えたらどんな魔法使うよ？」

「イケメン」

「またかお前」

答えになつてねーし！ と突っ込むことを忘れない。少年Aはいつも通りに騒がしかった。

ふ、と鼻で笑うBは、ふと口元が笑んでいるのに気付く。こいつのも心地良いな、とそう思っている自分が居るのだった。

「うるせーよ気にすんなや」と言葉を返しながら、いつからだっただろうか、と考える。

こいつとの腐れ縁は、いつから始まったのだろうか、と。

思い起こせば八年前。そういえば、齢もちょうど八を迎える頃だったかな、という話。始まりは、ありきたりだった。

ただ単に学校で同じクラスになったから。席替えて前後の席になり、初めて喋った二人。緊張もしながら、初々しい二人は互いに名前と顔を覚えた。そんな話。

それからずっと同じクラスで今まで八年過ごしてきた。偶然に包まれ、友情を育んできたわけだ。

気が合う二人だった。特に中学時代、アイデンティティを求めて固有の趣味を持つことも多々ある時期だ。二人はそのとき、これまた偶然、同じ趣味を持った。たまたま二人は同じく、音楽に傾倒したのだ。だからというわけか、腐れ縁はまだ続いている。

今ではもう、こいつを親友と呼んでも嘘にはならないんだろうかと、Bは自問する。

思い上がりも甚だしいな、とBはそんな自答で回想を締めくくる。

ただの腐れ縁 どうしようもない偶然が重なっているだけだ。

「…………お前はどなん？」

BはAに聞き返した。お前は生まれ変われたら、魔法が使えたらどうするのか、と。

「…………そつやなー」と、Aは悩む姿を見せる。頭をかき、俯き、顔をあげる。真剣に悩んでいるのが可笑しかった。

「うん」

不意に頷く。納得したような表情でAはBを見る。

「なりたいのは異世界の宇宙人。んで、使いたいのは、変身魔法」

返ってきた答えは、そんな感じのものだった。

別物化け物割れ物注意（前書き）

前話は見なかったことにしてください。

いや、むしろ、何も見なかったことにしてほしいです。

うん。

別物化け物割れ物注意

走る。

駆ける。

止まってはいけない。

そう何度も自分自身に言い聞かせながら、少女、モラは必死で足を動かしていた。

足場が悪い。地面は泥か苔か大樹の根。ぬかるむ。滑る。苛々する。

臭いが酷い。喰い捨てられた死体からの腐臭。鼻が詰まる。吐き気がする。涙が出そうだ。

視界が狭い。光を遮る、視界を遮る森の木々。あるはずの太陽。昼なのに見えない。

時間が無い。だからモラは、危険な地を一人ひたすら突き進んでいた。人間の居ない、魔物が巣くう森の中を。

森の名は、『ハミル』と言う。その昔、大暴れした巨大な魔物の名と同じだ。それはモラの住む村、ニフル。こちらは村の創設者の名と同じ。を一度壊滅させた化け物である。

モラはそのハミルという魔物を知らない。しかし、村や城下街に残る伝説からいくらか想像はついていた。その存在が、どれほどに強く、恐ろしくあつたのかについては。

そして今、彼女はその魔物の巨大さについて、知ることとなっている。

「……ほんとに。ほんとだったんだ」

走り抜けながら、モラは誰にもなく呟いた。今までこんな森に入ったことがなかったから、どうせ誇張だろうと信じていなかった

話が、現実であったことを知って。

今は、感謝する。その話が本当のことであったことに深く深く感謝する。伝え聞いた話が、目の前で、彼女の道標となっているのだから。

ここは誰も好き好んで通らない場所なのだ。整備された道などあるはずもない。そんな中を彼女が止まらず進めているのは、ハミルのおかげと言っても過言ではないだろう。正確には、ハミルの足跡のおかげ、ではあるが。

森の中、足跡というには大きすぎる不自然な凹みが、恐らく城下街　クリティスがあるのであろう方向に、点々と続いている。数百年前につけられたはずのそれが、今も確かに。

モラが母親から聞いた話によると、ハミルとはとつともなく巨大な魔物らしかった。そしてそいつは、彼女が今駆けるこの森を薙ぎ倒し、踏み締め、城下街に現れた。

突然現れた巨体は城下街や城の軍相手に破壊の限りを尽くし、死んだ。そう言われている。

「ふう……」

伝説はほんとだったんだ、と驚くモラに、そろそろ疲れが見え始めていた。

先程から、息は少し乱れ、足元は泥で汚れ、汗が垂れる感覚もある。二十分も走り続けているのだ。それで済んでいるだけ異常だろう。

でも、モラは急がなければいけなかった。苦しんでいる彼女の母親のために、たった一人。

愚直に。

モラの母親は、猛毒に冒されている最中なのだ。泣き言なんて言
ってられない。頼れるのは自分だけなのだから。
下唇を噛み、年齢に似合わない表情を浮かべるモラ。

その時、彼女を、残酷な現実が襲う。進む先に、魔物が二体、
睨み合っている。進行を阻むように、二十メートル程の幅を持って。
何の因果か、片方はモラの母親を襲った魔物、ギルイだった。ギ
ルイは約二メートル程の体、十本の足、背中から生える尻尾に無数
の針を持つ魔物だ。だが、そちらはまだ良い。逃げるには困らない
のだから。

問題はもう一体の方である。

ザフと呼ばれるその魔物の特徴は、複眼と強靱な二本の脚だと言
えるだろう。その広い視野、尋常ではない瞬発力は、モラにとって
非常に邪魔だった。

「……っ」

冷静に、相手が気付いていない間に木の陰に隠れる。見つかった
しまった場合、絶対に事態は悪化する。こんな場所を通る以上覚悟
していたことである。モラは落ち着きを失わない。

遠回りしてアレを避けて通るべきか。それとも強行突破するべき
なのか。できるのか。モラは素早く思索し始めた。

その時、だった。

甲高い声で、魔物のどちらかが叫んだ。睨み合いの均衡が崩れた
のかも、すかさずモラは状況を確認する。

「……騒がしいですね」

人の声が響く。更に言うと、平然とした男性の声だ。

覗き見る。

居る。男性が居る。あるつことか、二体の魔物の間に割り込むように、すたすたと歩いてきていた。

何だこいつは、とでも言うように、二体の魔物達は警戒心を剥き出しにしていた。

そしてそれは、モラも似たようなものだ。固唾を飲み事態を見守るモラは、腰を落とし、すぐに走れる体勢を作る。もしかすると、これは好機かもしれないのだから。彼女は警戒ではなく、ある意味その男に期待していた。

今はチャンスを不意にしてはられない。あと四時間もすれば、彼女は二度と母親に会えなくなるのだ。二度と、母親に会えなくなるのだ。

漂う緊張感。その中心で、魔物に両脇から挟まれながら、当然のように笑顔で居る男性。

何者なのかはわからない。今は、事態の変化を見逃すな。モラは、木の陰から顔を出して、目を離さない。

「……そんな怖い顔をしないでください」

男はニコリと笑う。眼鏡の奥の瞳が、モラを捉えていた、気が、した。

「ッ」

寒気立つ。咄嗟に、また隠れた。

……まさか。

心臓が、暴れる。

「ほら、落ち着いて。何をいきり立っているのですか」

まだ彼は喋っていた。何と。誰と。

モラは、落ち着くために深呼吸する。

そうだ。別に彼に見つかつたところで、特に問題などない、……はずなのだ。ゆっくり、ゆっくり、冷静さを取り戻していく。

「……私の言葉がわからないのですか？ ま、魔物ですから当然の話ですけどね」

語りかけるように喋っていたくせに、彼は勝手に自己完結した。

恐る恐る、また覗いてみる。モラは木から顔を出す。

すると、眼鏡の男性と目は合わなかつた。少し、安心した。男性は自らを挟む魔物達に意識を寄せているようだ。魔物達はいつのまにか、彼にかなり近づいている。

そして、今にも飛び掛かりそうな、とモラが思うと同時に、その通りのが起こる。

ザフの脚に力が入る。収縮したそれが、純粹な身体能力が、爆発する。

「……おや」

ザフが地を蹴る直前。それに気付いた男が一言だけ漏らした。

瞬間。

ザフが消える。跳び上がり、大樹の枝を蹴りつけ、男を上から襲う。

弾丸のような速度で、しかし体勢を変え、脚で男を狙う。男が反応出来ていないのを僅かに視認しての踏み付けだった。

モラにはほぼ見えない速度だ。だから彼女は結果だけ見ることになる。

障壁で防ぎ、微動だにしない男の姿と、その障壁で脚が潰れたザフのうめき声のみ。

男はザフを見遣る。そして、「全く、怖いですねぇ」と言った。怖いなどと、ちっとも感じていなさそうな声で。

それを見た瞬間、モラは木の陰から飛び出した。

アレで確実に、『ザフは動けなくなった』のだ。残りの二体の動きは、それほど素早くはないはず。

ザフの居た道が空いた。
今あそこは通れる。

そう、モラは判断した。迷いなく、それを実行に移した。

……しかし、しかしだ。

無意識に、『残りの二体』と数えるなら。あの障壁の展開速度を見ていたのなら。

彼女は躊躇うべきだった。

「ル」
「ル」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3316z/>

さくらんぼいず

2011年12月12日00時54分発行